

## 登場人物

どくまむし きんごろう  
毒蝮の金五郎

小石川の阿宝長屋に住む腕利きの岡っ引き。

あたからながや いせきち  
阿宝長屋の伊勢吉

金五郎と同じ長屋に住む下っ引き。

なつかわ さえちんのじょう すけあつ  
夏川左衛門丞介悳

南町奉行所、筆頭与力。

おしゆう  
お醜

伊勢吉の女房。

くそのぞうき すかたろう  
九園雑木 須賀太郎

柳橋で殺された雲国一座の役者。

たらばなや れいえもん  
橋屋 霊衛門

雲国一座の座長。

はるか

雲国一座の世話娘。

うらだ かげゆ  
浦田 勘解由

南町奉行所の町奉行。

つきがた いかのすけ  
月形 伊香之輔

南町奉行所の与力。

しゆか ちやうべい  
守家 長兵衛

南町奉行所の同心。

こねら  
小音千

居酒屋こねちの女主人。

## 真夏の毒蝮

長雨もようやく過ぎた文月しちがつの小石川。土壁すずも煤けて久しい阿宝あたから長屋の、闇井やみい稲荷から数えて三軒目に、近頃この小石川界限でも、めっぼう名が知られる様になった岡おかつ引きび、「毒蝮の金五郎」は住んでいる。

金五郎は「毒蝮」の異名とは裏腹に、もっぱら書物が好きで、この時代には珍しく、貧乏岡おかつ引きの割りに、唐からの書物や蘭学書を買ひ漁って嗜むのが日課であった。彼に「毒蝮」と名づけた者によれば、お役目を果たすときのしぶとく食い下がる姿勢を見て「まむし」と呼んだわけではなく、むしろ教養を深めることに異様なしつこさを發揮するから、「読書のまむし」で、「毒蝮」なのだと  
言う。

その毒蝮の親分が、この日もご他聞にもれず、軒先で書物を片手に一人物々ぶつぶつとつぶやきながら、ささやかな至福の時を過ごしていたのだが、晴天の夏空を引き裂く、突然の雹の如く、彼の下つ引き（岡おかつ引きの子分）が、見苦しい面を引っさげ、けたたましい声を張りながら、引き戸をパーンと開けて入ってきた。

その無粋な下つ引きの名は、「伊勢吉」という。面はといえば、梅雨時のナメクジのようなしまりのない目、まるで、口の中が窮屈で、たまらずに出てきた

かのような見事な出っ歯をたたえ、おまけに上方生まれの江戸訛りといった、極めて胡散臭げな男であった。

伊勢吉「お、親分、てえへんだあ！」

金五郎「なんでえ、なんでえ、伊勢吉。まったく毎度く騒々しい。おめえにや、耳糞ほどにも、雅みやびつてもんがねえのか。」

伊勢吉「へ、へい、すいやせん親分。でも、筆頭よりき与力なつかわの夏川様が、あつしに取り急ぎ親分を呼んでこいつてんで。」

金五郎「何だとお、夏川様直々の御呼びだと？するてえと、何か事件でもあったのか？」

伊勢吉「それが、あつしにも詳しいこたあ分からねえんですが、なんでも、柳橋のあたりで『殺し』があったそうで……。」

金五郎「柳橋っていや、ここから直ぐじゃねえか。で、下手人は拳がってねえのか？」

伊勢吉「さあ……、そこまでは、使いで来たあつしにや、とんと……。とにもかくにも奉行所に参りやしよう。」

金五郎「待ってな、直ぐ支度する。」

というや金五郎は、間仕切りに掛けておいた羽織をとって、さっと袖を通すや、十手を口に銜え、羽織紐を結びながら長屋を出、そのまま物も言わずに、急ぎ足で奉行所へと向かっていった。

奉行所に着いた金五郎と伊勢吉の二人は、いつもどおり門番に十手を見せて奉行所内に入り、同心達（与力の部下で下級武士）の作業場を、そのまま横目を通り過ぎ、筆頭与力である夏川左衛門丞介惇が控える一室に入った。

衾を開けると、部屋の上座に眼光鋭く骨太で、平和に慣れた江戸期の侍というよりは寧ろ、戦国期の荒武者の様な佇まいの武士が居た。

それが夏川である。

彼は威儀を保ちながら座布団に座り、刀剣油を和紙に濡らし、さる大名家から賜った愛刀、備前長船元讓銘の業物を手入れしている最中であつた。

夏川家は元来、幕府直参旗本の家柄で、介惇は歳若くしてその嫡流の当主となり、また、当時にしてはかなりの大男で、剣に至っては無限魏武流の免許皆伝の腕前とあつて、上司の町奉行は愚か、大目付けや老中ですら一目置くほどの男であつた。

その夏川であるが、二人が部屋に入ってきてても、刀を鞘にしまうことなく、

瞳すらその刃から離すことなく、しばらく黙々と手入れを続けながら、いきなり用件を切り出してきた。

「金五郎、よう参った。柳橋での一件、その方も、そこな伊勢吉から既に耳にしておろう。要件とはつまり、その件をそちに任せたいということだ。

無論引き受けてくれるであろうな？」

金五郎「へえ。まあ、あつしも目明しめあかし（岡っ引きの正式名称）の端くれ。殺しとあつちや、引き下がるわけにも参りやせんし、日ごろお世話になっている夏

川の旦那直々のお達しじゃあ、断ろうにも断れやしやせん。ですが、なにぶん、今のあつしは、『柳橋で殺しがあつた』ということくれえしか存じやせん。お調

べは、一体えどこまで……。」

夏川「仏は、旅役者『九園くそのぞうき雑木 須賀太郎』。旅芸人一座『雲国』の中で、女形おやまを

しとつたそうだ。それが、一昨晚の子の刻ねごろに、柳橋において、何者かに背後からうなじをバツサリ斬られた。他に争いで受けたような傷はなく、その一

太刀が命取りとなった。仏の亡骸は柳橋の下の茂みで見つかったが、恐らく橋から落ちたものであろう。欄干に血が付いていたのを、同心たちが見つけたそうだ。」

金五郎「で、下手人のおおよその目星は、ついておられるんで？」

夏川は、急に眉をひそませ、打粉を刀身に強く叩きつけ、「それがだ、全くといって良いほどついておらぬ。雲国の一座が江戸に入ったのが、五日前。その間に九園雑木が、江戸の町民と諍いさかいいを起こしたという風な話は一切無かった。そこで一座の者を洗ってみたのだが、仏が殺されたころには、仏以外の全員が、旅籠で宴会をしていたことを、宿の女中や芸者達が異口同音に証言しておる。」

金五郎「となると、昔の恨みか何かで、他藩から付狙ってきた者の仕業でございますか……。」

夏川「いや、それもない。東海道、中仙道などの全ての街道の関所を、同心たちに早馬で当たらせてみたが、それと思しき者の手がかりは無かったそうじゃ。

それに、恨みによる仕業とすると、恨みの深さにも依るが、致命傷になった傷以外に何も傷がないというのものなんとも妙な話だとは思わぬか。」

伊勢吉「となると、行きずりの物盗り、という線ですか。」

夏川「いやいや、亡骸を調べてみたのだが、何も盗られておらぬどころか、三两もの大金が入った財布がそのままになっておったそうだ。」

金五郎「……万事休すか。これは大捕り物になりやすねえ。」

夏川「同心たちでは埒が明かぬ。そこで、『毒蝮の親分』の登場よ。」

金五郎『あんたが、適当に名づけたくせに…』

夏川は、その後しばらくの間、黙々と手入れを続けていたが、やがて満足したのか、刀を鞘に納めて、咳払いを一つし、

「儂はこれから御奉行と出かけるゆえ、あとはそち達にこの一件を任せる。」とだけいうと、さっさと部屋を出て行ってしまった。

部屋に取り残された金五郎と伊勢吉の二人は、途方にくれる間もなく、障子越しに見える枯れた紫陽花の影を背に、柳橋へと向かうことにしたのであった。

## 劍客

二人が柳橋に向かう途中で、伊勢吉は下っ引の勘を働かせるというのか、無い知恵を一生懸命振り絞り、下手人像を想像していた。

すると何かを閃いたのか、突然ポン！と手を打ち、「親分。こういうことじゃ無いですか？ 仏さんは、柳橋でたまたま芝居に不満があつた客と出会い、口論になつて、で取っ組み合いになつてやられた……と。」

金五郎は冷めた顔で「お前えなあ。取っ組み合いの喧嘩で、蹴る殴るもなしに、いきなり、背後からうなじに見事な一太刀決めてお終えか？ それだと町人じゃあ絶対え無理だ。武家の……、それも相当腕の立つ侍じゃなきやとても出来る芸当じゃねえ。大体、文句を言うのに、態々柳橋なんて滅多に人気のねえところへ出向いて、しかも暗がりで人の顔も見れやしねえときに口論をおっぱじめるのか？」

伊勢吉「じゃあ、じゃあなんだつてんです？ 他に考えられねえじゃないですか。」  
相変わらず馬鹿なことを真剣に主張する伊勢吉に、ほとんど疲れたのか金五郎は、口を噤んでそのまま柳橋に向かつていった。

柳橋に着いた金五郎達は、まず現場と思われる欄干の辺りを念入りに調べた。

もし、激しい刃傷沙汰があれば、欄干や手すりに刃傷の一つや二つが残っていてもおかしくはないからである。

だが、それは一つとしてなかった。

しばらくしても何の手がかりも見つからないので、金五郎は伊勢吉に周囲の聞き込みをさせた。伊勢吉も、元は乞食同然の貧乏人で、庶民に溶け込むのが上手く、しかも金五郎と同じ阿宝長屋の住人でもあり、そこから程近い柳橋付近で、彼を知らぬものは無かったからである。もともと、一度見ただけで、忘れようにも忘れられない顔をしているという利点もあったからではあるが。

半刻もしないうちに聞き込みを終えた伊勢吉が、青っ鼻を垂らしながら金五郎の前に戻ってきた。

伊勢吉が言うには、この『柳橋』は通称『糞橋』といわれ、ひとけ人氣が無いために、よく、ここから1町(約100m)ほど離れた花街の客が、帰り際に酔った勢いで、ここでこっそり野糞を垂れるのだという。また犯行があった少し前、柳橋を覆面の侍が通ったのを目撃したという話もあった。

そこで金五郎は、今までの情報から事件を整理してみた。

『まず、何も盗まれなかったことや、特に揉め事があったという話もないため、

物取りや怨恨による殺害ではない。

九園雑木須賀太郎は、態々一座の宴会を抜け出してまで、この柳橋に来た。

須賀太郎が殺された際には、特に争った形跡もなく、ただ背後からうなじに一刀浴びて殺された。

犯行の手口から推測すると、明らかに町人の仕業ではなく、相当な腕を持つ武士の犯行である可能性が高い。

そして……犯行時の少し前に、柳橋付近で覆面の侍らしき姿を見たものが居る。』  
金五郎はしばらく黙って考えていたが、少しして、急にハツとした表情を見せ、青ざめた顔を奉行所の方へと向けた。

金五郎は押し黙ったまま奉行所にもどると、何か思い立ったのか、急いで死体安置場へ行き、須賀太郎の遺体を確認した。

遺体のうなじには、横一文字の切り口があったが、まるで測ったかのように綺麗に首の半分だけを斬られ、あとは胴体と繋がっていた。また。凶器は相当鋭利な刃物だったのだろう、骨から脊髄にかけて何のささくれもなく切れ込みが入っていた。

金五郎「……思った通りだ。」

伊勢吉「何がです？親分。」

金五郎「見てみる、この切り口は、まるで熟練の板前が柳葉で魚を卸すかのよう  
に鮮やかにできてやがる。これは相当な業物で斬った跡だ。その上、きつかり  
半分で斬り止められた骨。こいつあ、下手人は凄腕と名刀の持ち主で、しかも  
計算しつくしてやがる。」

伊勢吉「なんでそうなるんです？」

金五郎「まず、どんなに腕の立つ侍でも、ナマクラで斬りや、切り口が汚ねえ  
もんだ。そして、半分しか斬られて無い骨だが、首を完全に切り落とすと、  
胴体からの返り血がひでえが、半分だけを残して斬り、そのまま素早く体を抜  
いて須加太郎の前に立てば、血飛沫は後ろ向きに飛ぶから、下手人の体に付き  
やしねえ。もつとも、相当な腕がねえと無理だが、出来ねえことじゃあねえ。  
それと、骨を全部絶ち斬っちゃうと、どんな名刀でも多少の刃こぼれは避け  
られねえ……。返り血を浴びねえよう工夫するほど、ものの勘定が出来る侍えな  
ら、態々名刀に傷をつける様な馬鹿な真似はしねえのさ。」

つまりだ。下手人は、初めから須賀太郎を斬るつもりだった。そして闇夜で  
首を半分だけ残して、一瞬のうちに斬り殺す事が出来るほどの劍客<sup>けんかく</sup>。さらに刃

こぼれを気になけなくちゃならねえほどの名刀を持つ侍えってわけだ…。」

伊勢吉「でも、なんでそんな侍が、縁も所縁もねえ一介の旅役者を斬り殺すんですか？」

金五郎「別に誰でも良かったんだよ。」

伊勢吉「へ？」

金五郎「お前えは何年下つ引きやってやがんだ。辻斬りだよ、つ・じ・ぎ・り！名刀を手に入れた侍が、時々、無性に試し斬りしたくて、人気の無い街角なんぞで待ち伏せて、誰彼かまわず斬り殺すアレだよ！」

伊勢吉「ああ、アレね。辻斬り、辻斬り。なるほどOK」

金五郎『なんだよ。「OK」って。しかも知ったかぶりっぽいし…。』

金五郎「とにかく、小石川一帯で、その条件にあうと言ったら…。」

伊勢吉「でもそんな侍って、夏川様くらいしかいないんだよなあ。だからあつしは、親分の推理は考えすぎだと思いませんぜ。」

とことん鈍い伊勢吉に業を煮やした金五郎は「おめえ。さつき夏川様にお会いしたときのことだがなあ、たった一振り刀の手入れに、あんなに時間がかかると思うのか？」

伊勢吉 「まあ、人斬りしたあとは、あんなもんだそうですね。血と脂は中々しつこいからと、この前、火盗改め（盗賊討伐専門の役所）の旦那もそういってまし……あ。あああああああ!!」

金五郎 「あ！ば、ばか！奉行所内で大声を出すな！感づかれたらどうする気だ！」

伊勢吉 「もごもご……」

金五郎 「とにかく今日はこの辺にして、明日の夜明けに、夏川様と須加太郎の事件当夜の足取りを探ってみるとしよう。」

## 須加太郎の謎

次の日の早朝。まだ日も昇りきらぬ頃、金五郎は、着替えながら一つの謎について考え込んでいた。それは、一介の旅役者の九園雑木須賀太郎が、本来ならば旅籠の宴会に出席していたはずが、何故あの時刻にあの柳橋にいたのか……である。極めて不可解である。あの殺しがなければ、翌日も当然、芝居の公演が行なわれるわけで、その打ち合わせを兼ねた宴会であったはずなのに、それをすっぽかしてまで、川と草むらしかない柳橋へ行くというのは、金五郎にはどうしても納得がいかなかったのである。

柳橋付近の地理を少し詳しく言うと、柳橋の下には「水仙川」という川が流れ、花街や、芝居小屋、一座の宿は全て水仙川以東にあり、川の対岸（西側）には、材木問屋の倉がいくつか並ぶだけで、あとは田んぼが広がるのみである。わざわざ柳橋を渡って対岸に行く理由は、須賀太郎には全くないはずである。

夜明けを告げる鐘に気づいた金五郎は、とにもかくにも、今日は同じ長屋に住む子分の伊勢吉と一緒に、夏川の足取りと、芝居小屋で須加太郎についてももう少し詳しいことを調べるのが先決と、外に出た。すると、長屋の前で、伊勢

吉と、その妻のお醜しゆうとが朝っぱらから、大声で喧嘩をしているのが目に入ってきた。

お醜「あんた！こんな朝早くから家を抜け出して、また懲りずに酒を飲みに行く気かい！いい加減におしよ！」

伊勢吉「いてて、馬鹿やろう！今日はお役目で行くっていったらどう！ば、ばか！そんなところを引つ張るな！子供が出来なくなったらどうするんだ！」

お醜「まったくあんたって人は！この前、夜中にグデングデンに酔っ払って、ずっこけて顔中血まみれにして帰ってきたばかりというのに、まだ懲りないってのかい？」

伊勢吉「う、うるせえ！……あ、親分！なんとかいってやってくださいよ。お醜のやつ、今日はお役目だっというのにちっとも信じちゃくれねえんですよ！」

金五郎「しょうがねえなあ……また喧嘩かお前えたちは。お醜よ。今日の伊勢吉は珍しく嘘をついちゃいねえんだ。この前、柳橋で殺しがあつてな、今日はそいつのお調べで早く行かなくちゃならねえんだ。」

お醜「ああ、なんだ、そうだったんですかい。まったく、うちのロクデナシが、珍しくこんなに早くに起きて、あたしが眠ってるのをいいことに、コソコソと

着替えなんかしてるもんだからてつきり……。」

伊勢吉「それみろ！俺だって百回に一回は本当のことをいうんでい！」

金五郎「自慢にならんぞ……。」

伊勢吉は喧嘩でぐしゃぐしゃになった鬚を唾で直しながら、金五郎と共に長屋を後にしたが、ふと、金五郎の右手に包帯が巻かれているのを目に留めて

「それあ一体え、どうしたってんです？」と聞いた。

金五郎「ああ、これか。それが昨日、丁度奉行所から長屋に帰ったあとで気づいたんだが、手のひらに包丁のようなもので切った傷があつてな。それがいつ斬ったのか全然分からねえんだ。」

伊勢吉「へえ、不思議なこともあるもんですね。あ、あれですか、え〜と『構って君』だったかな……。」

金五郎は少し考えてから

「それはひよつとして『カマイタチ』のことかな？」

伊勢吉「ああ、それぞれ！そのカマイカリ！うひゃひゃひゃひゃひゃ。」

金五郎「……。」

金五郎と伊勢吉の二人は、奉行所から半里ほど歩いて、「雲国一座」の芝居小屋についた。

本来ならば見物客でごった返しているはずだったが、須加太郎殺しの件で、芝居は中止、小屋には閑古鳥が啼いていた。

金五郎は、伊勢吉に一座の者たちから、須賀太郎に関する情報を得るように指示し、自らは小屋の周りをぶらりと歩いて見回ることにした。

金五郎が何気なしに小屋の裏手に回ったとき、後ろから急に

「アイヤー！お客さん、今日は公演ないあるのことよ。」と、声をかける伊勢吉に負けず劣らずの胡散臭さを漂わせる唐服（チャイナ服）姿の男が現れた。

金五郎はいぶかしげに十手を見せると男は

「アイヤー！お客さん、十手持ち（岡っ引き）だったあるか。例の五右衛門の件で来たあるね？」

金五郎「五右衛門？誰でえそれは？」

インチキくさい男「アイヤー！それは須加太郎の本名あるよ。九園雑木須加太郎というのは芸名じゃけ、一座の者はみんな、本名の『五右衛門』って呼んでいるあるよ。」

金五郎 「おめえさん、長州訛があるようだが、一体何者でい？」

インチキくさい男「アイヤー！倭人であるのが、ばれてしまったあるよ。ポクは、この雲国くもくに一座の座長兼、手品師の橘家 靈右衛門（たちばなやれいもん）あるよ。この一座の者は皆、長州下関の生まれあるよ。」

金五郎 『「うんこく」じゃなくて「くもくに」って読むのか……。でも「倭人」って自分で差別用語使ってるよこの人……。』

靈右衛門 「ところで五右衛門の何が聞きたいある？」

金五郎 「ああ、そうそう。その五右衛門さんが殺された晩、やっこさんは柳橋に居たようなんだが、おめえさん、やっこさんが何で柳橋に行ったのか、何か心当たりでもねえかい？」

靈右衛門 「うんくん。そういえば宴会には来てなかったあるねえ……。でも、五右衛門からは特に何も聞いてないあるなあ。」

金五郎 「お前えさん、役者の一人が居なくなっても不審に思わなかったのか  
「さ。」

靈右衛門 「じゃけ、毎度のことあるよ。五右衛門はいつも、芝居が終わると、自分の部屋に籠って、葛籠から餓鬼草子やら、美人が糞を垂れる春画や艶絵つやえ（今

で言うエロイラスト）を引っ張り出してきて、じっくりと見るのが大好きで、いつも宴会にはこないのことあるよ。」

金五郎は絶句し、事実を飲み込むのししばし時間を要した。

靈右衛門「まあ、普通の人には分からない趣味に没頭してたあるね。五右衛門は。」

金五郎は息を整えると、直ぐにその場から離れたいのか「す、すまねえ。ありがとよ。」とだけ言って、芝居小屋正門前へと走っていった。

芝居小屋の正門に聞き込みを終えた伊勢吉が待っていた。

伊勢吉が、気分の悪そうな金五郎を見ると「親分！いい情報がありやしたぜ！」と、これまた気分を逆なでしそうな、けたたましい声を発して歩み寄った。

金五郎の不快感は絶頂に達しそうだったが、しかしお役目に関わることである。自分を抑えて伊勢吉の話聞くことにした。

伊勢吉「なんでも、あの須加太郎って野郎、人が糞をしている絵を見るのが三度の飯よりも好きだったそうですぜ。」

既に知っている上に、この上なく不快な話を二度も聞かされ、顔面蒼白で眩暈を覚えた金五郎であったが、それにとどめを刺すかのように伊勢吉が、

「ほれ親分。これがその証の絵ですぜ。あつしが思うに、やつこさんは、柳橋に、本物の糞覗きに行ったんですぜ。」と、態々須加太郎の楽屋から持ってきた糞の艶絵を、金五郎に見せ付けたのであった。

金五郎は力なくその場に倒れたのであった。

正門横では、一座の見世物の一つである舶来の巨猿が檻の中で「グログログ  
ロロ……。」と啼いていた。

半時ほど経っただろうか。

金五郎が目を覚まし、あたりを見回してみると、そこは芝居小屋の楽屋の一室で、傍には伊勢吉と、見覚えのない若い女子が金五郎の目覚めを見守っていた。

「あ、親分。お目覚めですかい。」

金五郎「お、俺は……。」

女「芝居小屋の前で倒れなすったんですよ。」

金五郎「ああ、そうだった……。で、お前さんは？」

女「あたいは、この一座の紅一点、はるかっというんだよ。ちゃんと下の世話もしてあげたわよ。ウフ♡」

はるかは、容貌こそ幼さの残る可憐な女子であったが、決して生娘ではないことは、そのどこと無く下品さの漂う立ち居振る舞いですぐ分かる。

伊勢吉「くぅ〜親分がうらやましいぜ！あつしも今度、小屋の近くで倒れてみようつと。」

はるか「あたい、出っ歯は嫌いなもの。」

伊勢吉「あうううう・・・」

はるか「ああ、そうそう。五右衛門さんの件なんだけどさ、ちようどあの晩に、衣装が無くなってるの。」

金五郎「衣装？」

はるか「あのね、お芝居用の紋付袴と竹光と覆面なの。あの衣装や小道具は、今やってる芝居に使われていて、あの日の芝居が終わるまではちゃんと使われていたのよ。」

それがあくる日になって、衣装箱を探したんだけど、見つからないのよ。なんか五右衛門さんと関係があるような気がして・・・。」

金五郎「・・・。それでお前さん、五右衛門さんの普段着が今どうなってるか知ってるのかい？」

はるか「そんな……。あたい殿方のお召し物を勝手にまさぐって、舐めたり、臭いをかいたり、こつそり盗むなんて下品なことしないわよ。」

金五郎『この女、やったことあるな……。』

金五郎「いやいや、そうじゃなくて、五右衛門さんの普段着や寝巻きが、全部揃っているのかどうか調べて欲しいんだ。」

はるか「えー！あんなウンコ野郎の着物を調べるの〜？」

金五郎「さっさと行け！」

しばらくしてはるかは戻ってきた。

はるか「全部あったわよ。へんね。外出していたのに、何も着ないで行ったのかしら……。」

伊勢吉「まあ変態だから。スッポンポンでも全然平気なんだろうよ、ね、親分？」

金五郎は、とてつもなくアホ一直線な伊勢吉を相手にせず、自分自身に言い聞かせるために推理を述べてみた。「やはりそうか！五右衛門は、糞覗きの現場で誰かに見つかった場合のことも考えて、武士の格好をして覗きに行ったに違えねえ。たとえば偶々通りかかった町人が、須加太郎の糞覗きの現場を見つけたと

しても、侍が相手じゃどうにもならねえ。奉行所も取り合ってくれないし、第一、刀を刺しているやつが相手じゃ、何をされるか分かったもんじゃないからな。よし！これで須加太郎が柳橋に行った理由がはつきりしたぜ！

伊勢吉！あとは夏川様の足取りを追っただけだ！行くぜ！

伊勢吉「あいよ！合点だ！」

## 毒蝮の罠

日が暮れるまで、金五郎と伊勢吉の二人は、小石川中を練り歩いて夏川介惇の足取りを追い、夏川の行きつけの料亭、駕籠屋などを舐潰しに当たってみたが、特に得られる情報はなかった。

伊勢吉「日が落ちる前から覆面をして歩いていたら、誰にもわからねえですぜ。」

金五郎「ばか、この小石川一帯で、あんなにでかい侍が他にいるか。覆面していったって察しがあつかあ。さては夏川様の権勢をもって、口封じをしているのかもしれないが、そんな素振りの奴あいなかったしなあ。」

伊勢吉「あの橋に行き来できる筋道は全部当たったんですけどねえ。だれも怪しいのは居なかったし……。」

金五郎「……筋道……？……あ！現場は橋だったんだ！何も陸おかの上から柳橋に来るとは限らねえ！」

伊勢吉「じゃあ空の上からですかい？」

金五郎「馬鹿野郎。一体なんのために、その馬鹿出っ歯生やしてんだ！。川だよ川！船を使って柳橋に行ったんだよ！」

小船の渡し場が柳橋の下流にある。そしてその直ぐ傍に夏川様のお屋敷がある  
じゃねえか！」

柳橋の西岸に材木問屋の蔵があるのは前に述べたとおりだが、その蔵の直ぐ裏  
には材木置き場がある。材木商は、山から切り出した丸太を筏状にして、川に  
流しながら運ぶ。従って柳橋の下に流れる水仙川は、さほど大きくも無いが、  
丸太流しに都合の良い、水流が穏やかでかつ深さもある川で、丸太流しが無い  
ときには、下流にある米問屋などの小船が自由に行き来したりするのである。

金五郎「伊勢吉。すまねえが、渡し場へ行って当たってみてくれ。俺あ、もう  
一度柳橋を調べてくる。何かあったら柳橋まで来てくれ。」

伊勢吉「合点承知の介でえ！」

金五郎が、柳橋に着いたとき、橋には数名の武士の姿があった。

南町奉行所の長官、即ち町奉行の浦田<sup>うらだ</sup>勘解由<sup>かげゆ</sup>と、その供回りの与力、同心達  
であった。

浦田勘解由は、前任の町奉行までの相次ぐ不祥事による免職の繰り返しによ  
り、ついに後任の奉行候補者が居なくなり、その穴埋めとして、やむなく、決

して悪知恵を働かせるような者ではないということ、とりあえず任命された男である。(同時にお役目を満足に果たす智能もないということだが……。)そしてその座を、やがてメキメキと頭角を現してきた夏川に奪われるのが時間の問題であったことは、浦田本人以外はみな知っていることでもあった。

余談はさておき、金五郎は、この場に浦田が居ることを良いことに、夏川を召し取ることを大目付に上奏してもらおうように考えた。旗本である夏川を召し取るには、町人を取り締まる町奉行ではなく、大目付の力が必要だからである。

金五郎「お奉行様。阿宝の金五郎でございます。お役目ご苦労様でございます。」

浦田「おお、毒蝮の金五郎か。お役目は順調かの。夏川が忙しいので、代わって儂が直々に実地検分を兼ねた視察に参ったわけよ。」

金五郎「それはそれは……。恐れ入りやす。ところで、その件に関して少しお耳にしたいことがございやして……。そのう……。」

浦田「うん？なんじゃ？申してみい。」

金五郎「いや、あの、そのう……。」

浦田「なんじゃ。そちも恥かしがりやじゃのう。フオフオフオフオ。」

金五郎『どうして俺の周りは、こう鈍い奴ばっかりなんだろ……。』

しかたなく金五郎は、小声で「お人払いを……。」「と、血の巡りの悪い奉行に耳打ちした。

金五郎は、浦田に須加太郎殺しの一件の顛末を詳らかに話した。たまたま排てんまつ便を覗くために柳橋に来た須賀太郎は、不運にも、名刀の試し斬りに来た夏川と遭遇し、一刀の元に斬られた、というだけのことであつたが、浦田がそれを理解するにはしばし時間が必要だつた。

だが、ようやく事情を飲み込んだ浦田は

「なんと！お上をも恐れぬ大胆不敵な所業。しかし、夏川はこれまでの奉行の不正を公にし、奉行所の綱紀を肅正してきた第一功労者じゃ。彼の者に限つてそのような事があるとは……。」

その話を、供回りの者の同心の一人が、橋の下でこっそり聞いていたのだが、彼は常々、夏川が奉行所にいる限り自身の出世や富貴は望めぬと考えていたので、ここで夏川を罷免させることが出来れば、間拔けな奉行の下で夏川の後釜に出世、あるいは、すき放題賄賂を受け取ることが出来る……と奸計を企み、ここぞとばかりに浦田に詰め寄つて、「お奉行。拙者は、夏川殿が、お奉行を奉行職から追放しようと思つておると聞き及んでおります。あるいは、浦田

様以前のお奉行も、実は、彼奴めの陰謀によって失脚したのかもしれないぞ。」と誣告したのである。

信頼する部下にそうまで言われ、すっかりその気になった浦田は「うぬぬ！ 儂が折角目をかけてやったのに、忘恩の輩とは、まさに夏川のことよ。あい分かった。儂が直々に大目付様に掛け合い、夏川召し取りのご許可を仰いで参る！」決して夏川は、浦田ごときの後押しによって今の地位に登った訳ではなかったのではあるが…。

だが金五郎は、浦田を引き止め、「ちよいとお待ちくださいませ。事が大事に成ると夏川様にばれる恐れがございやす。もし夏川様に知られば、逃亡の機会を与えるかもしれやせん。それに、夏川様を捕らえようとしても、相手は並々ならぬ練達の士でございやす。こちらの追っ手に相当な被害が出るのは分かりきってございやす。そこで、実地検分と称してこの柳橋まで夏川様を誘い込むのぞございやす。この柳橋付近には、予め捕り手を伏せておき、夏川様が橋の中心に差し掛かったところで、お縄にするのがよろしいかと存じやす。また、川に飛び込んで逃亡する恐れもございやすから、火盜改めの方々にもお出ましただき、橋の下に小船で隠れていただきやしょう。そうすれば逃げ場を失っ

たことに気づいた夏川様は、神妙にお縄につかれることをごさいやしよう。」と、  
万全の策を浦田に献策した。

浦田は「うむ、うむ、うむ！その方、中々の知恵者じゃ。早速そのようにとり  
計らおう。儂は奉行所に戻り、戌の刻半にここに夏川を誘い出すゆえ、守家（し  
ゆか）、月形（つきがた）、その方ら兩名は、それまでに各番屋で三十名の捕り  
手を掻き集め、また火盜改めにも使いし、船で助勢するよう依頼せよ。」と珍し  
く迅速に手配した。

既に日は落ち、無数の蚊が金五郎たちの耳元を煩わせていた。

## 悲しみの柳橋

須加太郎殺しがあつてから、もうすぐ、ちようど三日が経とうとする戌の刻半。奉行の浦田に命じられ、柳橋まで共をした町奉行所筆頭与力の夏川介惇は、柳橋のたもとにまで来て突然足を止め

「お奉行。なにやら曲者が潜んでおる様子。これ以上お進み召さるな。」と

浦田に耳打ちした。

内心ギクリとした浦田は、「な、な、な、なにを、も、も、申す。こ、こ、こは、ひ、ひ、ひ、人気のない柳橋じゃ。そ、そ、そのようなことがあるわけなからう。」と必死で誤魔化そうとしたが、夏川は「いや、間違いござらぬ。」といつて、頑としてその場から動こうとはしなかった。

浦田は生きた心地がしなかったが、四半時ほどその状態が続くと、やがて痺れを切らした同心の一人が、刀を抜き夏川の背後に襲い掛かった。しかし、その刹那、その同心はバンという音とともに、宙を舞い、そのまま水仙川にドブンと落ちたのである。

夏川の一撃は峰打ちだった為に、その同心は水に落ちただけで済んだ。

溺れている同心に向かって夏川は「曲者め！この儂を町奉行所与力、夏川介

惇と知つての狼藉か！」と怒鳴つたが、それと同時に捕り手が一斉に姿を現し、夏川を取り囲んだ。

腰を抜かしていた浦田だったが、這いずつて捕り手の方へ逃げると、「な、夏川左衛門丞介惇！妄りに、旅芸人の九園雜木須加太郎こと、五右衛門を斬り殺した廉により召し捕る！既に大目付様のご裁可も頂いておる！もはや逃げ場はない！神妙にお縄につけ！」と、精一杯の勇気を振り絞つて口上を叫んだ。

柳橋一帶に緊張が走り、川の流れさえも無くなつたかのような不気味な静寂が辺りを包んだ。

しばらくして、突然、夏川が刀を鞘に納めた。

捕り手一同は唾を飲んだ。

金五郎は前に進み出て「夏川様。年貢の納め時ですぜ。この期に及んではもはや申し開きもごさいやせんでしょう？どうか、このあつしに免じて神妙に縛についてやってくださいやし。」と言つたが、夏川は「はて、これは一体全体どういうことだ？」とまるで理解しておらぬようであつた。



それでも尚、浦田の供回りの一人の月形伊香之輔（つきがたいかのすけ）が、「だ、黙れ！須加太郎のうなじには、鮮やかな、それも相当な業物でないと付かぬ切口があつた。無限魏武流の極意とは、無駄斬りを一切せず、急所を一刀で仕留めるにあるという。そんな芸当ができるのは、お主の他に一体誰がおるといふのだ！」と罪を着せようとしたが、「では拙者の刀をご覧頂くとしよ。う。」と夏川は言う、自慢の備前長船元讓を帯から抜いて、ポイツと、月形の方へ投げつけた。

月形は、急いでその刀を手に取り、鞘から刀を抜き、捕り手の提灯を近づけさせて、じっくりと嘗め回すかのように、刀身を検証した。結果、全くの無垢であつた。刃こぼれは愚か、人の血や脂の付いた痕跡は一切ない。実に見事に提灯の明かりを反射している。一度血や脂がつくと、どんなにふき取っても、その部分の反射光は鈍くなるものである。しかし、夏川の愛刀は煌々と輝きを湛えている。

これで夏川下手人説は完全に崩壊した。

しかし、そうになると本当の下手人は一体誰なのか…。

金五郎は必死で考えた。謎は今の柳橋よりもずっと深い暗闇を湛えている。

だが、その答えは、あっけなく見つかった。

どこからか、金五郎を呼ぶ声がした。伊勢吉である。

「おおい！親分！証拠の品らしい物が、渡し場の船にひっかかってたのを見つけてやしたぜ！！」

伊勢吉は全力で走ってくる。と、そのとき伊勢吉の足が小石に躓き、バランスを失った伊勢吉は回転し、たまたま金五郎の傍にいた捕り手の一人をかすめた。

と、その瞬間であった。その捕り手のうなじから、大量の血が噴出し、不運にもその捕り手は、その場で倒れ命を落としたのである。

一同は唾然とした。その捕り手の傷を見れば、須加太郎のそれと寸分たがわなかったのである。

金五郎は、ふと今朝の伊勢吉夫婦の喧嘩を思い出した。

「……お醜」まったくくあんたって人は！この前、夜中にグデングデンに酔っ払ってずっこけて、顔中血まみれにして帰ってきたばかりというのに、まだ懲

りないってのかい？」……

つまりこうである。

三日前の晩、非番だった伊勢吉は、花街と柳橋の丁度中ほどにある行きつけの飲み屋「こねち」で、浴びるほど酒を飲んでいたのであった。こねちの女主人の小音千は、小股の切れ上がった美人ともつぱらの評判で、伊勢吉は非番の日になると、必ずその女主人目当てにこねちに行き、夜遅くまで酒を飲むのである。

そして、たまたま糞覗きに来ていた須加太郎が、橋のたもとで糞覗きを楽しんでいたところに、泥酔して前後の見境がなくなった伊勢吉が通りかかり、先ほどのように石に躓き、腰をかがめて夢中になっている須加太郎の背に倒れこんだ……というわけなのである。伊勢吉は泥酔しており、何が起こったのか全く覚えておらず、顔は血まみれ、体は土まみれで帰宅し、須加太郎が橋から下の草むらにころげ落ちる際に、紋付の羽織と竹光と覆面が川に落ちて流れた……。

凶器は出っ歯であった。それは金五郎には直ぐに分かった。

昨日、奉行所で金五郎が斬った右手の手のひらの傷は、伊勢吉が遺体安置所で大声を出しそうになったとき、彼の口を塞いだときについたものだと悟ったのである。

地面にうつ伏せに倒れて、その出っ歯が地面につき刺さり、動けなくてもがいている伊勢吉の左手には、覆面が握られていた。

金五郎はそれをとってみた。武家の覆面は、頭から肩までを完全に覆う頭巾になっており、当然うなじをすっぽりと覆い隠すのだが、その覆面のうなじ部分には、須加太郎のうなじの切り口と全く同じ大きさの切り込みが入っていたのであった。

これで、柳橋で町人に目撃されたという覆面侍の正体が、夏川ではなく、変装した須加太郎こと五右衛門本人であったことが判明した。

それから三日後の正午。奉行所のお白州において、町奉行ではなく大目付が取り仕切る異例のお裁きが行なわれた。

そこで、出たお沙汰は…

元町奉行の浦田勘解由とその一味は、江戸市中お騒がせ、旗本を侮辱し幕府の權威を損なわせた廉、及び、火盜改めまでも巻き込んだ前代未聞の誤審の罪により、自宅謹慎の後切腹、さらに御家お取り潰しをおおせつかった。

毒蝮の金五郎も同じく、お役御免、及び、江戸所払い（追放）。

そして、真の下手人だった阿宝の伊勢吉は、市中引き回しの上、火あぶり獄門と相成ったのであった。

それからさらに月日が流れた……。

女「お奉行様！」

夏川「おお、小音千ではないか。息災にしておったか？」

女「いやだわあ、お奉行様ったら。このごろちつともうちに来てくれないんですもの。」

夏川「ははは。小音千にはかなわぬ。」

女「あれから、三ヶ月。早いものですねえ……。」

夏川「うむ。もうすっかり肌寒くなった。やがてこの柳橋にも白いものが降るのであろうな。」

女「きつとその雪が、この橋の悲しい出来事を包み隠してくれますわ。」

夏川「そうさなあ。……さて、寒さしのぎに「こねち」自慢のおでんとやらでも馳走になるとするか。」

二人が橋を離れると、一陣の木枯らしが、砂煙を立てて通り過ぎていった。

やがて来る厳しい冬の訪れを知らせるかのように……。

終